

2019年(平成31年)

4月12日

金曜日

夕刊

神戸新聞

神戸新聞社 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7 <https://www.kobe-np.co.jp> 購読のお申し込み 0120・

こうして書いていると、バイクの音がしてくる。夕刊を配るバイクだ。同じバイクでも、新聞は海側から、郵便は山側からくる。

とりあえず、ここまで4行書けたので、キッチンに行つて水を一杯飲んで、新聞を取りに出る。

玄関には、メダカがいるので、ついでにエサもやろう。金魚鉢と水がめがあつて、メダカは水がめの中に入っている。

金魚鉢は、今は空だけれど、少し前までは、尾っぽがひらひらでちよつと紡錘形の赤い金魚が入っていた。その前には、胸びれと尾びれがひらひらで白と赤の丸つこののが、その前には更紗模様のひらひらが、その前には、黒い出目金もいた。どれも、電車で三つほど向こうの駅前の金魚屋さんで買ってきたものだ。今はもうそんな街の金魚屋さんもほとんどなくなつた。水もぬるんできた。また、新しい金魚を買いに行こう。

玄関の横の郵便受けから新聞を取る。かたん。これは、新聞を取

随想

こうして書いていると…

寺田 匡宏

り出した音。

そして、郵便受けから取り出した新聞を開けて読む。今日は、ぼくの「随想」の最終回が掲載される日だ。いつものように天気予報を見てから読む。

——で、その「随想」はこう始まる。「こうして書いていると、バイクの音がしてくる」…ん？ん？ あれ？ ぼくは、こうして書いていたのではなかったのだから？ いつの間に、こうして郵便受けの前に立って新聞を読んでいるんだ？

書くことも、読むことも不思議だ。書いていると、いつの間にか書くことに中に入ってしまう、読んでいると、いつの間にか読むことに中に入ってしまう。それは、言語による不思議。人間は言語によって、世界の中に、想像と象徴の別の世界を持つ。この不思議に、ずいぶん長く魅了されてきた。まだ当分離れられそうもない。

(つらだ・まさひろ) 総合地球環境学研究所客員准教授